

3.

それぞれ火山現象からどう避難するか  
～ハザードマップ改定のポイントと活用法～



- 溶けた岩石が連続して地表を流れ下る現象
- 富士山の溶岩の温度は1200℃程度
- 流れる速度は市街地では人が歩く程度

注意すべき災害：埋積、火災

災害エリア：火口の下流側、数km

規模が大きくなれば数十km

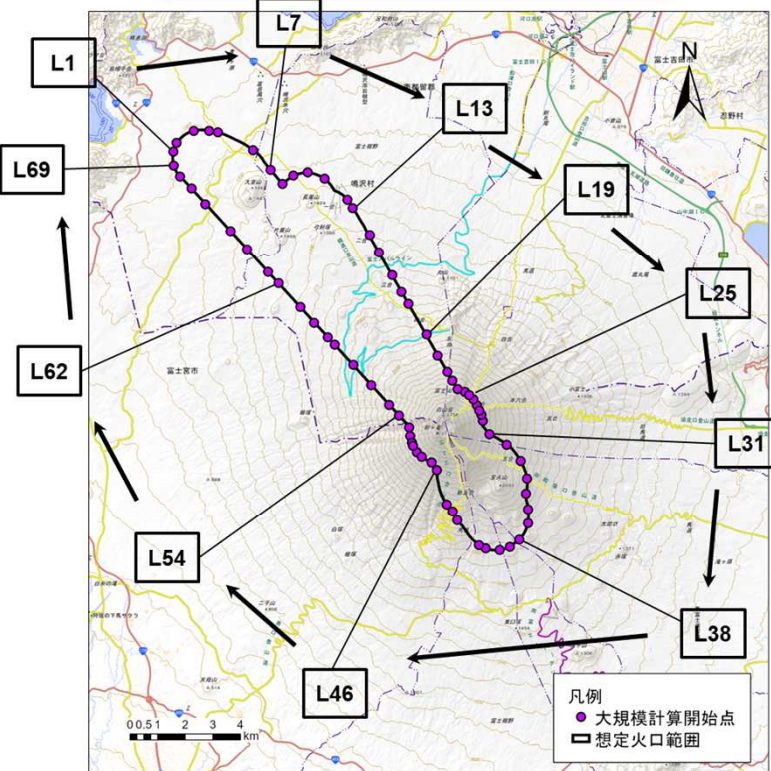
## 避難のポイント

- 溶岩流が全方位に一気に流れることはない。
- 溶岩の流路から離れば、人命への直接的な影響はない。
- 噴火が発生したら
  - ➔ 火口や風向きを確認！
  - ➔ 流路にいる場合、慌てず一端、流路から離れる。
  - ➔ 避難は流路に近い人から！

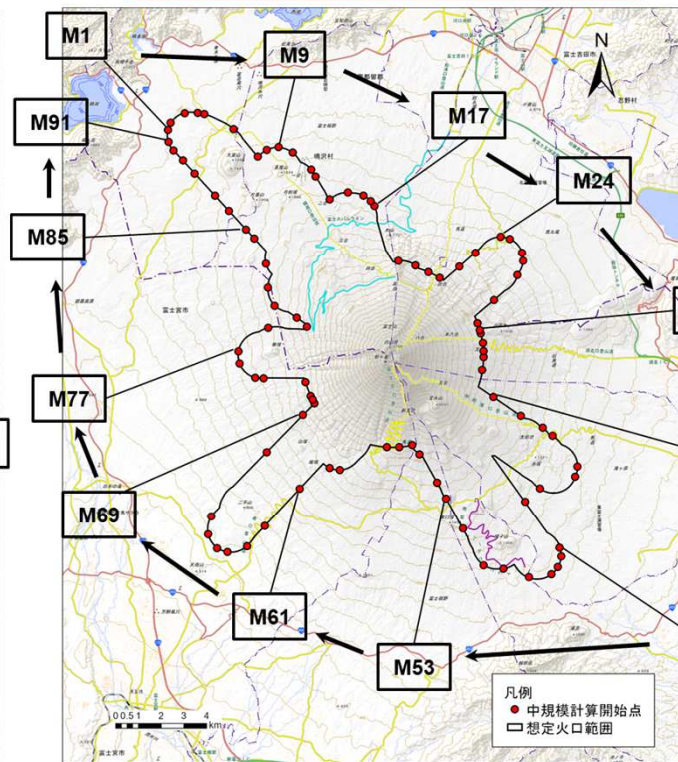
**ドリルマップを確認し、どのあたりに火口ができた場合に、自分の居る場所がどのくらいの時間で影響を受けるのか、避難の方法を確認しておきましょう！**

- 252箇所の計算開始点を設定してドリルマップを作成
- 居住地域へより早く到達し、影響範囲がより広がる状況を把握するため、想定火口範囲の外縁の谷地形が交わる点や、尾根・山腹斜面を計算開始点として設定

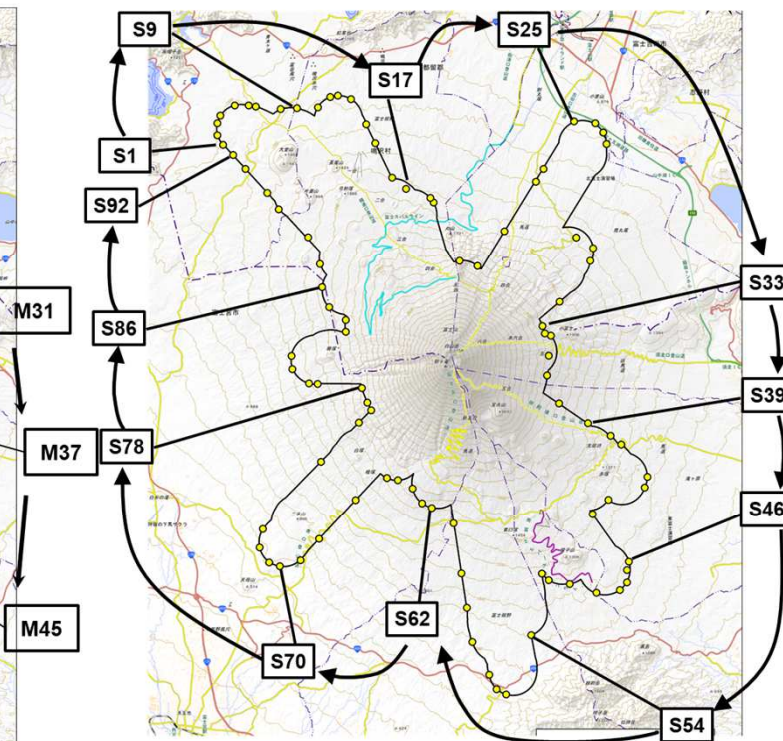
大規模噴火 計算開始点  
69 箇所



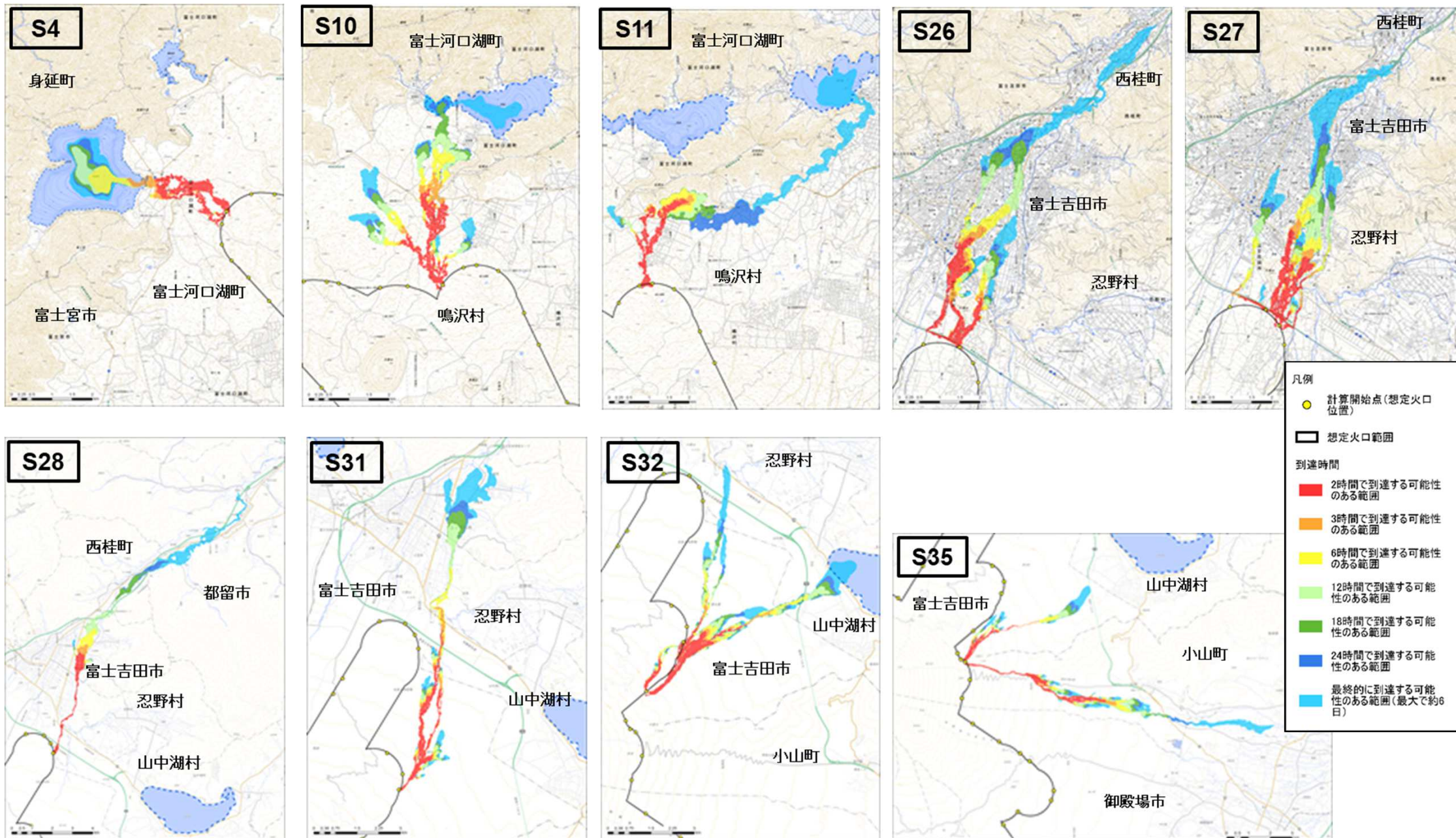
中規模噴火 計算開始点  
91 箇所



小規模噴火 計算開始点  
92 箇所

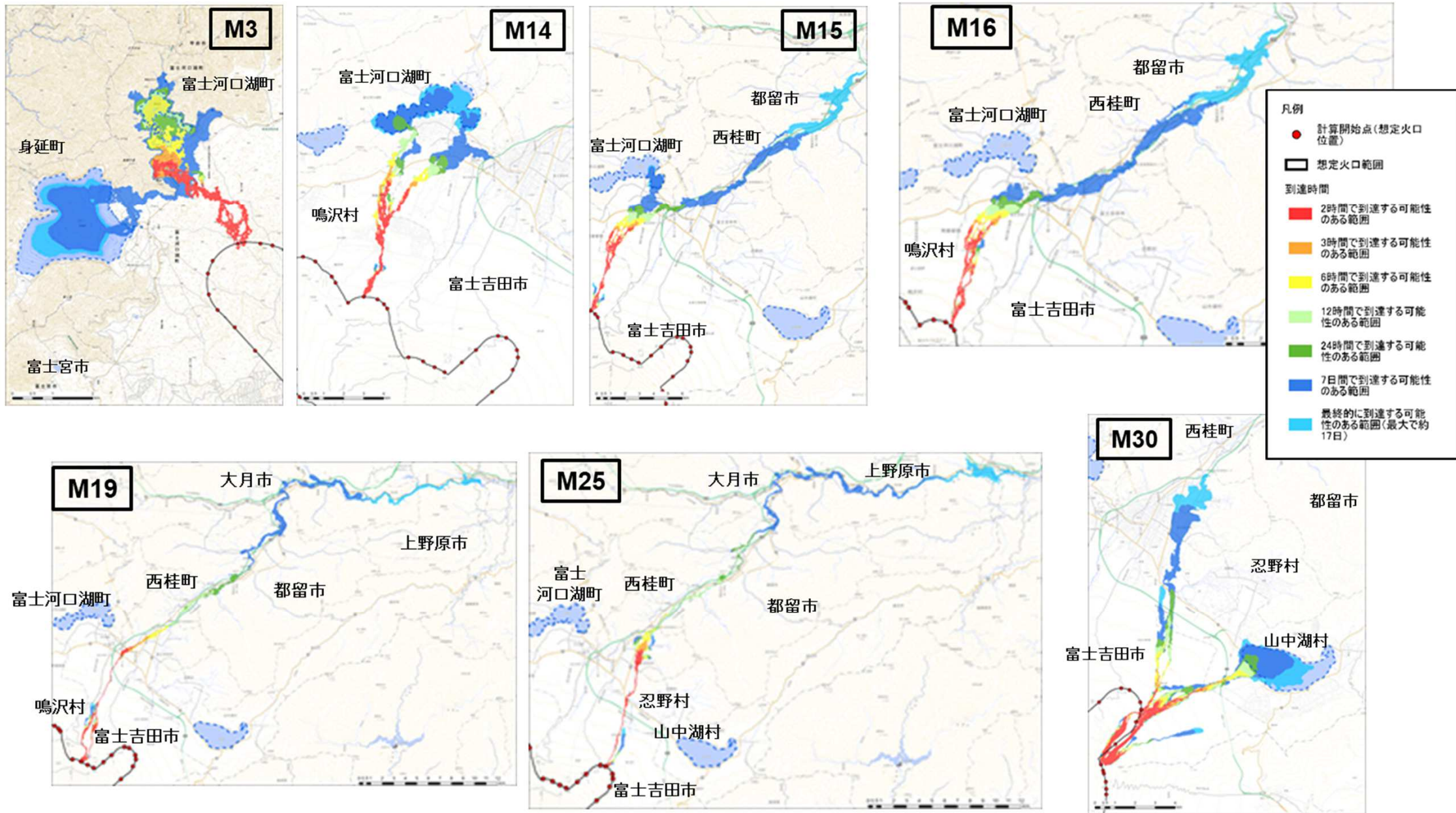






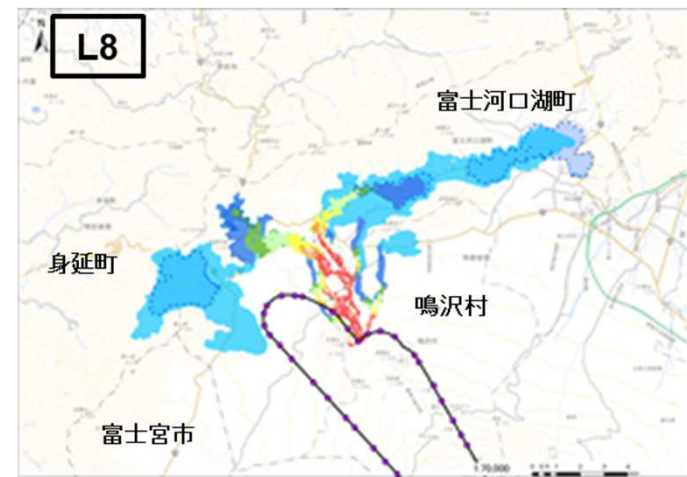
※ 計算開始点から溶岩流が発生した場合の計算結果であり、これら以外の場所で噴火が発生した場合は、異なる結果となる。





※ 計算開始点から溶岩流が発生した場合の計算結果であり、これら以外の場所で噴火が発生した場合は、異なる結果となる。





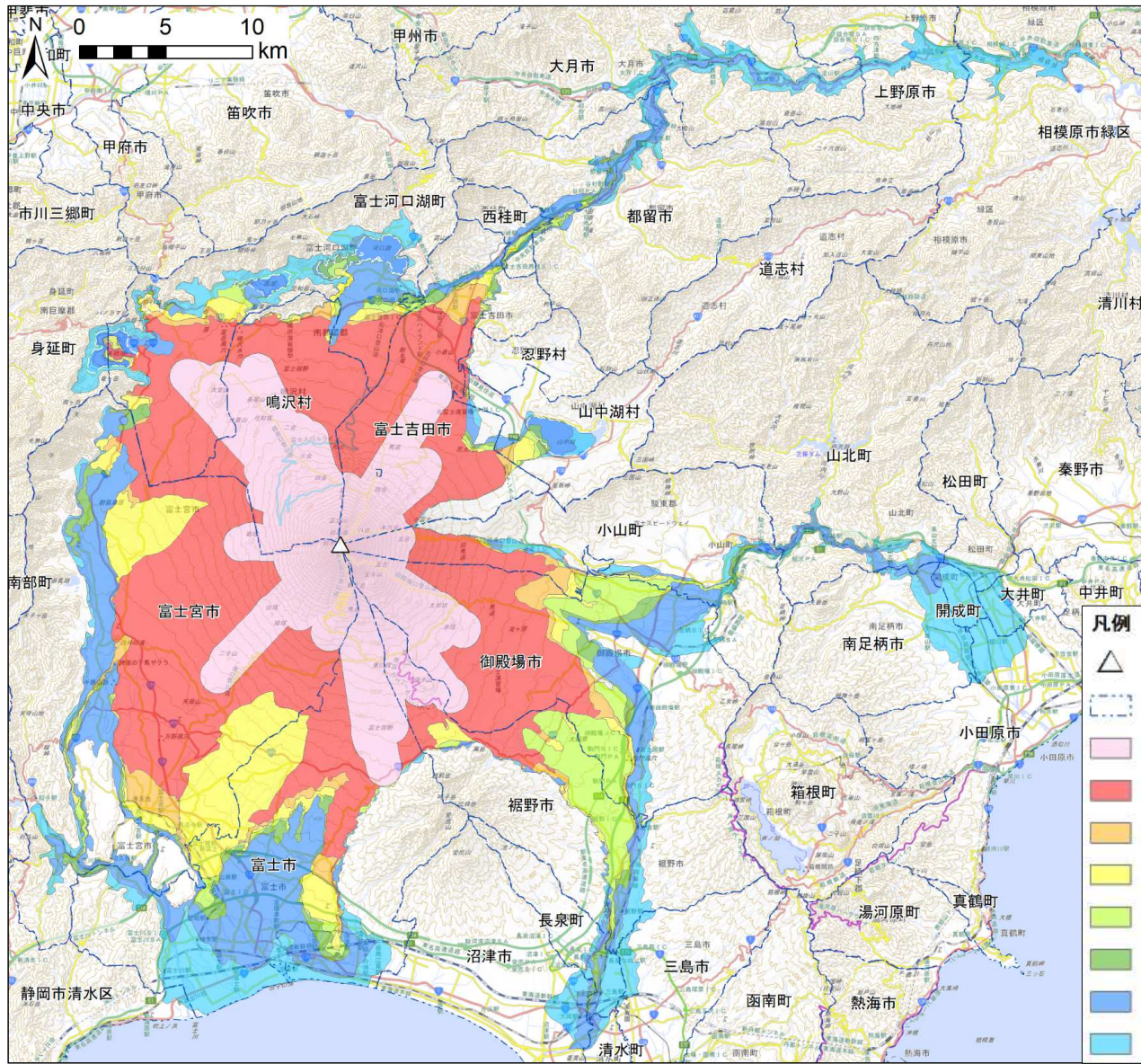
※ 計算開始点から溶岩流が発生した場合の計算結果であり、これら以外の場所で噴火が発生した場合は、異なる結果となる。



# 溶岩流の可能性マップ

ここがポイント！

- 市街地などへの溶岩流の到達時間が早くなった
- 溶岩流の到達可能性範囲が拡大



(注) 一度の噴火で、ここに塗られた範囲の全てに溶岩流の危険が生じるわけではない。

凡例

- △ 山頂
- 行政界
- 噴火する可能性のある範囲
- 溶岩流が2時間で到達する可能性のある範囲
- 溶岩流が3時間で到達する可能性のある範囲
- 溶岩流が6時間で到達する可能性のある範囲
- 溶岩流が12時間で到達する可能性のある範囲
- 溶岩流が24時間で到達する可能性のある範囲
- 溶岩流が7日間で到達する可能性のある範囲
- 溶岩流が最終的に到達する可能性のある範囲(最大で57日)



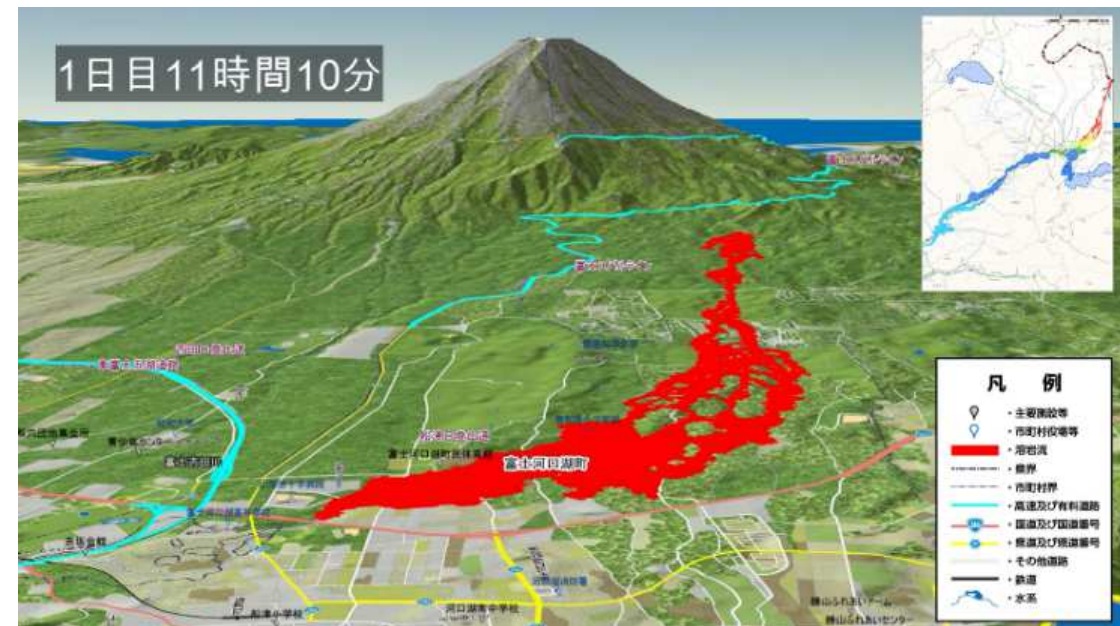
富士山の火山現象を正しく理解する素材として、溶岩流が時間経過とともにどのように流れるのか具体的にイメージできるように「**溶岩流シミュレーション動画**」を作成しました。

どこから噴火したら、どの地点に、どれくらいの時間で溶岩流が到達するのかを確認し、避難行動を検討する際の参考資料としてください。

## ◇動画の公開先

山梨県火山防災対策室のホームページ内

<https://www.pref.yamanashi.jp/kazan/fujisanhunkadouga.html>



<動画イメージ>





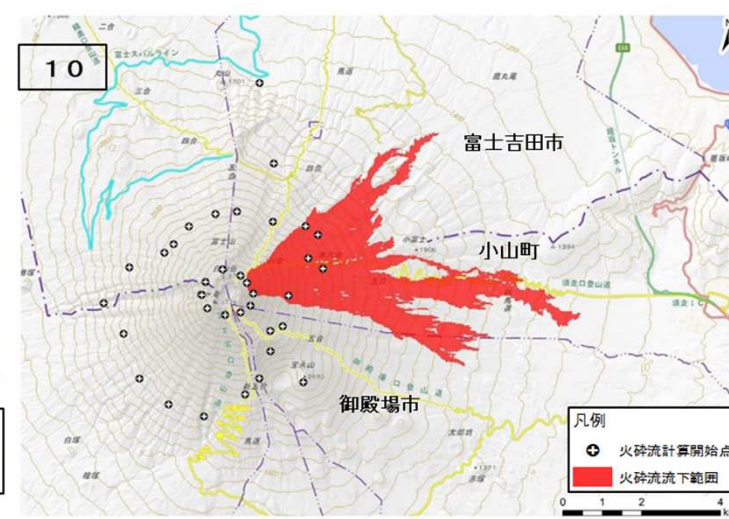
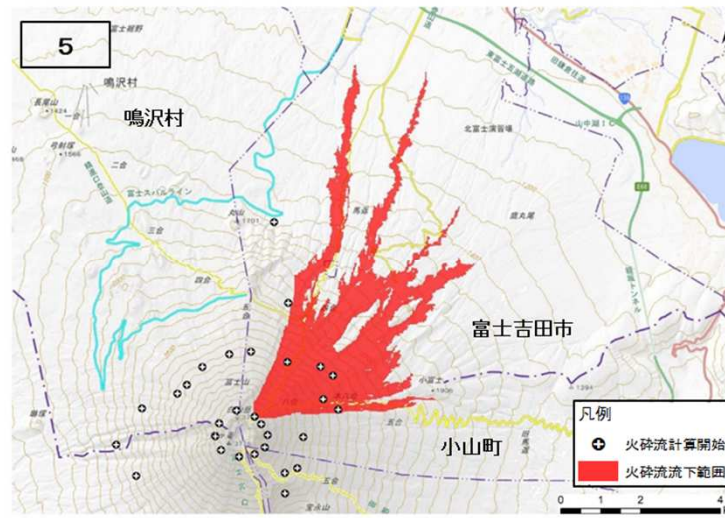
- 高温の岩石が周囲の空気を取り込みながら高速で斜面を駆け下る現象
- 温度は600°Cを超えることもある。
- 時速100kmを超えることもある。
- 高温の疾風（火砕サージ）を伴う。

災害エリア : 富士山で山頂から10km圏

## 避難のポイント

- 発生後、到達予想圏内にいると**避難は不可能**
- 富士山では噴火直後に発生する可能性は低い。
- 噴火の予兆が見られたら → **影響範囲内に入らない。**
- 噴火が発生したら → **速やかに、影響範囲外に離脱する。**

火砕流が発生してから逃げることは至難であるため、緊急時に、  
速やかに影響範囲から離脱できるよう、**可能性マップを確認しましょう！**

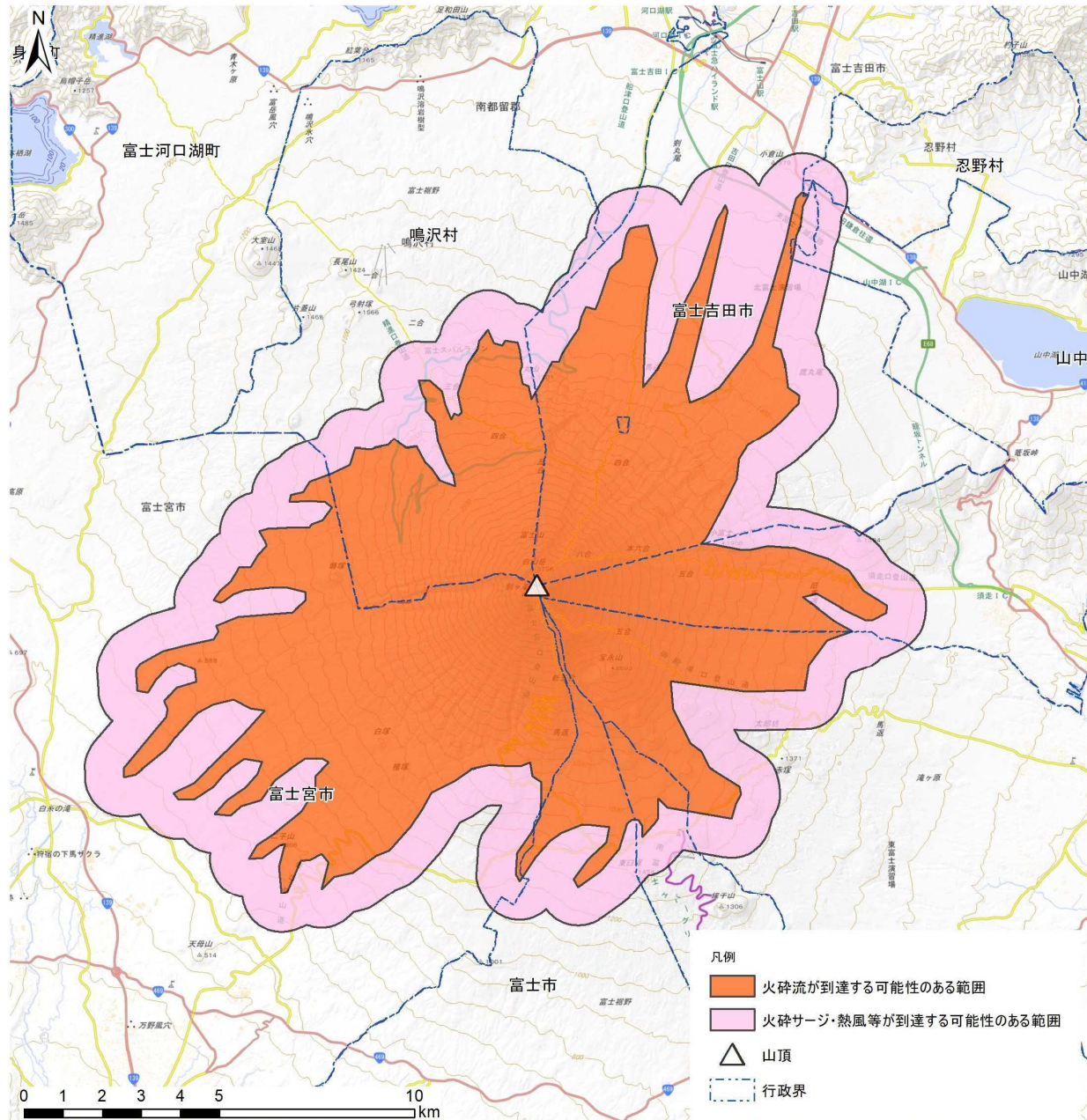


※ 計算開始点から火砕流が発生した場合の計算結果であり、これら以外の場所で発生した場合は、異なる結果となる。



ここがポイント！

## ➤ 北東方向及び南西方向に、火砕流の到達距離が拡大



(注) 一度の噴火で、ここに塗られた範囲の全てに火砕流の危険が生じるわけではない。